



第23回 筑前木屋瀬

宿場まつり

「歴史と文化を活かした地域の活性化」の目的で始められ、二十...

「地域の文化と伝統の伝承」をコンセプトに子どもも参加できる...



「地域の文化と伝統の伝承」をコンセプトに子どもも参加できる...

「宿場まつり」には各団体、町内会より100名を超す方々に...

寄せ太鼓

道館会 長崎県 長崎市長 長崎市長 長崎市長...

又、こやのせ座では、木屋瀬市民センターのクラブに発表会を...

木屋瀬宿の御触書

幕末の旅人改

木屋瀬みちの郷土史料保存会 松尾 良美



引き廻しの図 (『日本行刑史』より)

元治元年七月に筑前藩 うち途中にある興玉神社の寮内では、豊前・筑後・肥 裏側に設置された。この社...

「宿場まつり」には各団体、町内会より100名を超す方々に...

「地域の文化と伝統の伝承」をコンセプトに子どもも参加できる...

「乙丑の獄」で一族預けとなるが、同志二人と脱走して捕縛されて...

4施設連携 ひなまつり イベント 開催中

現在みちの郷土史料館企画展示室では、「長崎街道ひなまつり 木屋瀬宿〜立場茶屋銀杏屋」...

総合問い合わせ先:長崎街道木屋瀬宿記念館 TEL:093-619-1149

昔話

【柴田豊廣遺稿集より】

■ 神聖な聖域 (賀正)

昔は、門(カド)は南の庭であった、その南の庭のまん中に、神聖な聖域の目印として松の木を立て、神のお降りをいただくのである。これが新年をお迎えする、門松である。

注連縄(シメナワ)とは、俗世界と神聖な聖域との境界を示す縄である。新年を迎える住居全体が、神聖な聖域であるという事を表わすために、家屋全体を注連縄でぐるりと取り巻いていた。

山笠をかきまわし押しまわし、町全体を神聖な聖域に浄化する。こうした中で本町区の区長であった私は祭典の町飾りに、それは大英断の気構えで、注連の子だけをつけた縄を本町区全域に張りめぐらした。色彩上では乏しきさはあったが、それが何と今では全町に用いられ尚つづけられている。そしてこの注連の子縄が、祭り木屋瀬全町を明るく清々しい神聖な聖域に統一している。植木町でも、注連の子縄を見かけるようになった。感無量である。

■ 桃の節句 (雛祭)

源氏物語にひひな遊びが出るが、これは約千年前に雛祭の原体があつた事を意味する。ひひなどは紙や木片にて人間の形を小さく作った初期の雛人形である。雛人形に食べ物を供えたり、雛人形の前で友達とお客ごっこをしたりする事は、ままごとあそびの原体である事も意味している。雛人形は人間がもつ多くの罪けがれを背負わされて、川に流されたり火に焼かれたりするものである。こうした事が今も尚守りつづけて有名なのが鳥取の流し雛である。雛祭りは娘心の願いや迷いを、雛にたくす小さな信仰であつたが、五段七段と段飾り雛を競つて用い華やかな床飾りに変身した。

桃の節句の三月三日は奇数が重なる日だからと祝い、女性には必ず薬草を飲んでいた。桃の種の中の胚乳を飲む事で、女性の栄養と体調を整えられると信じていた。菱餅には増血剤に蓬を入れ、解毒剤には梔子(クチナシ)を入れ、血圧低下剤には菱の実を入れる。この三種類を作り、魔除の意味をもつ菱形に切り、主食の丸餅の上のせてお供えし、健康をお祈りするのである。

結婚披露宴の新郎新婦は、ご神酒のつぎに三種の菱餅をいただき、すこやかな幸福をお祈りする習慣が。古い木屋瀬にはあつた。

本町 柴田由美子

12月5日、6日須賀神社にて8名の児童によります平成27年度子供恵比須頭(かしら)が行われました。この祭りは、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、男の子が数え年11歳(現在の4年生)になると地域の若衆(わかしゅう・大人)の仲間入りをする儀式として執り行われたものです。昔は男の子もこの年頃になると奉公に出たり家業の手伝いをしたりして、子ども時代に別れを告げる習慣があり、この期を境に大人の仲間に入ることになります。武士社会では「元服(げんぷく)」として祝福したそうですが、これに相当する町民方の行事だと思われまふ。



笹山笠で町内を巡行

わる(御幣)といひ、獅子頭(しがしら)などを棒持した神幸の行列が「とまれ」とまれ「旅の客」と歌いながら町内を廻ります。本年は天候に恵まれ、子どもたちも元気いっぱい楽しんでいました。

現在では毎年12月の第1土曜日と日曜日の2日間にわたつて行われ、笹山笠を作りそれに紅白の幕を張り頭(かしら)になった子どもの名前を書いて町内を練りまわります。笹山笠の巡行のほかには、須賀神社に伝

木屋瀬冬の伝統行事 『子どもえびす頭』

この地に育つた男の子たちにとっては一生一度の祝事であり忘れられない故郷の思い出として残るものです。この子どもえびす「頭」の経験を生かして、色々な事を頑張つてほしいと思つています。そして、古い民族習慣として木屋瀬に残つたこの行事を後世に伝えていつてほしいと思つています。

最後にになりましたが、この行事の準備から本番までご協力いただきました皆様方、またご芳志くださいました皆様方に、平成27年度子供恵比須頭の関係者を代表いたしまして、心より御礼を申し上げます。

世話人代表 遠藤 孝男

多数のご来館・ご参加 ありがとうございます

こやのせ NewYearコンサート

木屋瀬宿記念館では平成28年1月17日(日)、響ホール室内合奏団の方をお迎えしてコンサートを行いました。

わかりやすく、楽しい説明と共にモーツァルトなどのクラシックの名曲や鉄腕アトムテーマ曲等、幅広いジャンルの演奏していただきました。

また、今回は弦楽器の他にフルートが加わり、今までと違った音色で会場内を盛り上げていただきました。来場者は約150名と大勢の方にお越しいただきました。誠にありがとうございました。



今年で13年目の人気講座 “木屋瀬時代の散歩道”

平成27年9月25日(金)~10月23日(金)に行われた講座“木屋瀬時代の散歩道”も、今回で13年目となりました。全5回の講座を開催し、木屋瀬に関するテーマを中心とした講義や、木屋瀬をはじめ佐賀県の長崎街道浜宿、塩田宿の見学を実施しました。今年の参加者は33名と多くの方が熱心に受講していただきました。ありがとうございました。

過日、新聞に遠くない時期に全国の自治体の五割が消滅するとの衝撃的な記事が出ました。少子高齢化と都会への人口の流出が進み、地方の過疎化が急速に進んでいるとの報告記事です。寺院も当然それに伴い、現在廃寺や無住寺院が増え、全国で無住寺院は、二万カ寺に達しているとの報告もあり、宗教界にも大きな反響を呼びました。

とも書かれ、宗教活動が不活発な状態が長く続き、二十八世住職が亡くなる前から、檀家の信頼を失くし多くの檀家が離れ、その後住職不在の空寺状態になっていたので、宗門では直方市の長遠寺の住職の兼任寺として存続させていました。

空寺、廃堂の状態であつた、妙運寺を見事再興された、佐々木和憲上人にお話を伺いました。上人は、北海道で生まれ、小学校を終え、中学、高校は秋田県で過ごしました。父上の仕事の関係で各地を転々とし、静岡県の製紙会社に勤めていたとき、順子夫人とご縁を頂き結婚しました。と語られました。その後夫人の実家の近く、はせがわ美術工芸に就職し、「勤めをしながら、義父の寺、宮若市の妙仙寺の住職を師

僧と仰ぎ僧侶となる発心をし、修行を始め、「度牒」を治め「信行道場」を成満し、日蓮宗の一人前の僧侶となりました。その後、平成四年に、第一回の大荒行に挑み成満しました」と語られました。大荒行とは、極寒の季節百日間午前三時から深夜一時まで、読経と水行の終日修行で、食事は朝夕のお粥と味噌汁だけの過酷な行です。行者達は、十数キロ痩せ、別人のような姿で荒行堂を後にすると言われている修行です。上人は、二回の大荒行を成満されています。第一回の荒行を成満してから、妙運寺の住職としてのお話があり、平成五年に入山しました。住職不在の状態が続いていましたので、寺は大変荒れていました。まず内陣の荘厳を手がけ、大黒天など四体の尊像を祭り、本堂も宗教空間として参拝できるように整えました。一番問題

初御空駕の輪を描く遠賀大手寒垢離やわれ一本の道を行く宿場木屋瀬街づくりの会 会長 野口靖彦

第36回 日蓮宗 正乗山 妙運寺 第三十世 妙運寺住職 佐々木和憲上人を訪ねて



第三十世妙運寺住職 佐々木和憲上人